

くらしの中で読む『正法眼藏』

王索仙陀婆の巻 その四

成興寺住職 小倉玄照

南泉のことば

〈本文〉

南泉一日、鄧隱峰とういんぽうの来るを見て、遂に淨じょう餅びょうを指して曰く、

漏しゃす。泉、即ち休きゆうす。

すでにこれ南泉、水を索もとむ。徹底して海枯れ、
隱峰、器を奉ず。餅漏もれて漱しゃうを傾く。しかもか
くのごとくなりといへども、境中有水、水中有
境を參学すべし。動水也未。動境也未。

〈現代語私訳〉

「淨餅は即ち境なり。餅中に水有り。境を動どう
著ちやくすることを得ずして、老僧がために水を将もち
來れ。」

峰、遂に餅水を將もつて、南泉の面前に向かつて

ある日、南泉は、鄧隱峰とういんぽうがやつて来るのに出
会つた。いろいろ話がはずんだ後、とうとう淨
水用の瓶を指さして言つた。

「淨水用の瓶は、私の目には見えるが私とは

別箇の事物である。瓶の中には水がある。本来

私は別箇の事物である瓶を動かすことなく、
老僧のために水を持って来て貰えまいか。」

鄧隱峰は、思案していたがやおら瓶の口を南
泉の眼前に向けて水をジヤーツとそそいだ。南
泉は、何もいうことがなかつた。

まったくこれは、「南泉は水欲すれど、海水枯
れつくし、鄧隱峰が器を奉れば、瓶の水はあた
かも池水のあふれるがごとし」といった案配か。
しかもそうでありながら、自分が見ている向こ
うの世界には水があり、また水の中にもその世
界がある、といういふなれば水と瓶との一体の
ありようを修行によつて究めねばならぬ。水を
動かすことはできぬか、瓶を動かすことはでき
ぬか。

奇矯な振る舞い

ここに引用されているのは、「南泉淨躰是
境」として知られる公案。南泉普願（七四八

八三四）も、鄧隱峰（生歿年不詳）も、共に馬

祖道一（七〇九—七八八）の法嗣です。南泉は、
『碧巖錄』や『從容錄』の公案の主人公として
しばしば登場しますが、鄧隱峰はあまり有名な
祖師とはいえないかもしれません。

『景德伝燈錄』卷八に、その伝記があります。

唐の元和年間（八〇六—八二〇）のこと、鄧隱
峰は、五台山に登るため淮西の地を出発しまし
た。途中、反乱を起こした吳元濟の軍隊と官軍
との交戦の場に遭遇した鄧隱峰は「錫を空中に
放ち、身を飛ばして」そこを通過したということ
です。両軍の将兵たちは、それを見て戦意を
すっかり喪失してしまつた、と伝は記します。
このような奇蹟を鄧隱峰は次々に表したので

しょう。それが人々を惑わすことを恐れて自ら五台山に入り、金剛窟の前で入滅してしまいました。その最期がまことに壯絶です。今まで誰もやつたことのない死に様をしてみせようと意図して、倒立をしたかたちで息を引きとった、というのです。

いわゆる「南泉淨躰是境」のこの話も『景德伝燈錄』卷八によっています。この話は、鄧隱峰が、今述べたような奇跡に近い行為をしばしば演じた祖師であるということを抜きにしては読解が不可能でしょう。

自分にとつては、まったく必要のない瓶はそのままにして、水だけを届ける、ということは、常識的にはまったく不可能なことです。しかししながら、しばしば奇跡を演じると噂されている鄧隱峰ならひよつとして可能なことかもしけね——南泉は、そういう伏線の上でののを言つているのです。



三益龍

もちろん、鄧隱峰は、人々の目を欺くような

現実世界も複雑

奇矯な振る舞いを初中していたにしても、神がかつた奇跡を手品師のごとく演じていた人物ではあります。瓶の中から、水だけをサーツと空中に立ち上らせ、それを南泉の口に注ぎ込む——そんな奇術的なことがやれるわけはありません。

戦闘中の野を空中に身を飛ばして通過したという話にしても、死をも恐れず平然と戦場を走り抜けるという奇矯な行為に、兵士の方が肝をつぶしたのだ、と考えてごらんなさい。それは、さもありなん、という話になります。

さて、鄧隱峰は、南泉のからかい半分の問い合わせに対し、瓶の水のすべてを南泉の眼前にぶちまく、という奇抜な方法で答えました。しかも、それが問に対する答にちゃんとなっているところがまたすばらしいのです。

話はちょっと変わりますが、私は今、町の教育委員をしています。町の中学校の教育水準が低下して、生活指導や進学指導の面で問題続出の状況が数年続いています。

例えば、中学時代に、模擬テストの偏差値で輪切りにされて、実業課程のある高校に進んだA君。保育園時代のことをよく知っている家内は、A君の進学先を聞いて、首をかしげていました。大学進学のコースへどうして行かなかつたのか、と不思議だったようです。

はたしてA君は、夏休みにならぬ間に登校拒否を起こし、遂に退学。幸い、両親がしつかりしていた人だったので、A君の悩みをよく理解して、中学浪人として塾に通わせました。そして、翌年の春には、いわゆる名門の普通科高校に合格。三年生の今は、大阪大学を受験するの

だといつて頑張っています。

そのA君、ある時、

「ぼくの青春に中学時代はない」

という名セリフを吐いたと聞きました。

私の愚息なども、中学時代は成績もパツとせず、やつとのことで普通科高校に進学したのですが、高校生になつてからは、

「勉強って何と楽しいんだろう」

と、毎日鼻歌まじりで勉強するようになり、成績もどんどんよくなつて行きました。その後が、中学卒業以来、大学生になつた今も、中学校へは決して足を運ばないし、中学時代のことを家庭の団欒時にも話題にしたがりません。

潜在的には優秀な能力を所持しながら、たまたま中学時代に、先生や親に対する不信感を募らせて勉強を怠り、いわゆる偏差値からすれば三流高校にしか進学出来なかつた子の悲劇もたくさんあります。少なくとも小学校時代までは、

家庭の農作業も積極的に手伝い、児童会長までこなしたはりきり屋のR君が挫折したのも中学時代。結局、こと志と異なる高校にしか入れず、アルバイトに精を出し、ある日、深夜の国道でオートバイ事故を起こして若い生命を散らしてしまいました。

M君も悲劇の主。中三のとき、担任が面接して進路を問うた時、彼は、大学進学の名門普通科高校か、だめなら誰でも入れる高校でよい、というやけくそ的な答をしたそうです。母親があれこれと浮名を流し、家庭が崩壊してしまつていましたから、彼の生活も荒れていたのです。担任は、模擬テストの偏差値をもとに「普通科は、無理だな」と言つたらしい。彼の生活は、ますます荒れて行きました。難なく入れる高校に進んだ彼は、これも夜ふけて女友達を単車の後に乗つけて交通事故。高校も中退してしまつたそうです。

先生方は、自分では一生懸命やつてゐるつもりらしいのですが、高校へのいわゆる進学成績もパツとしないし、反抗的な行動をする荒れた生徒も多いようです。学校側は、この町の親が教育に关心が薄いから結果として生徒が悪いのだ、と言います。親の方は、中学の先生の指導がおかしいのではないか、と寄るとさわると陰口を言つています。

私が輪番で教育委員長をつとめているとき、中学校の校長さんが停年になる時期が来ました。かつて高校に勤務していた頃の同僚などが、今、働きざかりで、県の教育委員会の課長になつたりしているのですから、私はそのユネを頼つて、いい校長さんを私の町に廻してくれ、と秘かに陳情活動をしました。みんなよしよし、と引き受けってくれ、その年の三月末には、人事担当の偉い人が「自信を持つていい校長をまわしたからね」などと言つてくれました。

では、その後、私の町の中学校がよくなつたか、というとどうも一向に変わりばえがないのです。中には、「前の校長さんの方がまだマジじゃつたよ」などと公然という人すらある始末で、こうなると、私がやつた運動は、はたして何であつたのか、と自己嫌悪に陥つてしましました。

おまけに、その後も性懲りもなく、生徒や親の情報を集めて、今、ガンになつている先生はこのあたりが、と目星をつけ、人事移動に厳しく注文をつけたりしたものですから、現場の教員組合から反発を食う始末。このごろは私もすっかり匙を投げた感じです。

境中有水、水中有境

私は、何とかよい先生を集めたいと悪戦苦闘したのです。しかし、それは、言つてみれば、瓶を動かさずに水だけを求める、というおよそ

不可能なことに大真面目に取り組んでいたにすぎません。

南泉は、水を索めました。私は、よき校長さんを索めました。鄧隱峰は、南泉の索めた無理難題に対し、ずいぶん荒っぽい答え方をしました。県の教育委員会の偉い人は、私の厚かましい要望に、まことに丁重に応じてくれました。しかし、水を求めるながら結局それを得られなかつた南泉とまつたく同じ轍を私も踏んだようです。望んだような名校長さんは結局得られなかつたのです。

ごく普通に、「隱峰さん、ちょっと水を」と言えば、南泉は水を自分の思いのままに入手したことでしょう。私も、下手な手段を講じることなく、運を天に任せて、いい校長さんが来られればいいがなあ、と念じていた方が結果は、案外よかつたかもしれないのです。強引に自分の都合を優先させてみても、結局は、全体のバランスの中でことが運んでいくのです。

かと言つて、運命論者のように消極的になつていればよいというのでもなきところがむずかしいのです。「境中有水、水中有境」を学



ばねばならぬのです。つまり、いい校長さんを求めるようとすれば、いい宿舎を整えたり、町長さんや教育長さんを中心にして、本当の意味で子供を大切にする教育行政が町で行われていなければならぬのです。

それはとてもむずかしいことです。私が一人で力んでみてもどうなるものではありません。むしろ、力めば力むほど結果はよくないことは、さきほど述べたとおりです。

「水中に有境」が大切なことです。自己の利害打算を離れて、本当に子供の立場に立った生活を日常に実践して行けば、自ずとその周辺に子供を大切にする環境が広がって行くのです。もつとも、文明の発達と共に人間の横着本性はとめどもなく肥大して来ました。やがて「修行」というようなことばは、古語辞典にしか残らないのではないか、と思われるほどになつて、いるのが現代です。

大人も子供も自然の摂理に即して、もつともつと横着本性を抑制しなければならないのではないか、という私の教育論が、そう簡単に受け入れられる素地は、現代にはありません。しかし、だからといってあせつてもどうにもならないのです。小学校も、中学校も、町の教育行政も、なるようにしかならないのです。

私は、ただ私なりに縁ある人々と一緒に子供と誠実に対応していればいいのです。それが「水中に有境」なのです。

「動水也未、動境也未」

そうです。水を動かすこと、状況を動かすこと、私には出来っこないです。そのところを悟った上で、しかもなお、教育や保育に黙々と努めるようにせよ——道元禅師は、そんな風におっしゃつているような気がします。